

子どもたちのこと

## 6. 子どもらしさ

大橋 利恵子

四月、新入園の4才児を今年は一クラス三〇名ずつで迎えることができた。どんな子たちだろうと期待をもちながらの入園式、そして大きすぎの一週間が過ぎ、ゴールデンウィークになるころには、幼稚園に慣れて少しずつ園児らしくなってきた。そのころにはそろそろ、それぞれの子どもの子どもらしさが見えてくるようである。

H君は色白の笑顔がかわいい男の子である。二人兄弟の兄で家では祖母がおもりをしてくれ、何でも自分の思うようにしていたようである。そのH君が本領を發揮するのにたいして時間はいらなかった。まだみんなが絵を描いたり、ブロックで静かに遊んでいる時から、自分の目につく遊びに次々に飛びついていった。クレヨンもはさみもマジックもみんな出して、画用紙に描いたり切ったりしていたかと思うと、ブロック遊びの中にわりこんでいって友だちを押す。その子に押しかえされると今度は突きとばす。そして「ほく 友だちきらい」とふくれつつらをしてみせる。やれやれと思いつながら他の子にかまっていないとH君がいない。もうさっさと戸外に遊びに行っている。そして、大抵、池か水道へまっしぐら。「もう帰らなくてはならないから、お部屋にもどってきて」と言っても知らん顔。しっかりひっぱってこなくてはやめられない。そんな

な風だから、自分の物がどこにあるうがおかまいなし、くつ、上ぐつ、帽子、タオル、クレヨン等々、毎日二〜三回は「H君、落し物」とおとどけしなくてはならない。それでも本人はごきげんで帰りには「先生、またくるね。」

H君本来の姿を出せているという点においてはこれでもいいのかもしれない。子どもらしい子だなと思つて、おもわずこちらも困つていたことを忘れてしまい「またきてね」とにっこりしたくなる。その天真らんまんさには本当に脱帽である。でも……がやはりつく。どうしても教師の目から見た時に、子どもらしくていいとだけは言つていられない。しかしこちらのわくを押しつけて、きちんとさせるのはあまりにもおもしろい気がするし、H君のよさがつぶされていってしまうようにも思う。

そういえば、一昨年の4才児にも同じように、自由奔放でいかにも子どもらしい子どものR君がいた。R君も遊ぶこと、特に気にいつている水遊び、積木遊びなどにはすぐく集中して遊べるのだけれど、自分の身じたくをするとか、話をきちんときくとか言うことになる、ほとんどだめなタイプであつた。そんな風だから、友だちとの遊びより、自分で好きに遊ぶほうがよかつたようで、5才児後半まで、一人遊びが多かつたようである。4才児入園後、一ヶ月ぐらいのころに、R君ができないことを教えると大変なので、できるようになつたことを教えてあげようと心に決めた。そしてまた、R君のやりたいことは

時間や場所が許すかぎり保障していくことにし、かなりじっくりとR君につきあつた覚えがある。それでどうなったかと言えば、集団生活のわくからはみ出てしまうことはないけれど、一人特異な存在だった。かといつて遊びの面でR君にこれをやらせたら他の誰よりも、というほど打ちこんでいるわけでもなく、何か中途半端なままだったような気がする。

無論、H君とR君は違っているし、保育に「タイプ別の手だて集」というのがあつてはならないと思つている。でも、H君に対して自分がどのように接していけばよいのか、目下暗中模索であり、反面、H君がどのように伸びていくのか楽しみでもある。子どもらしい子どもが少なくなったと言われる今日このごろ、あのH君のエネルギーを大切にしたい。でも生活のルールは守つてほしい。ただ形を教えるのではなくて、本人がくつをしまつておかないとくつがなくなつて困ると思つて、しまうようになるまでじっくりつきあつていきたいと思つてはいるのだが……。

(岐阜市立北幼稚園)